

君との約束、最後の日。

1

プロローグ

「この音声作品を視聴する前に室内の電気を消し、最小限の明かりだけを残した環境にすると、より一層楽しむことが出来ます」

「……準備は整いましたか？ それとも、そのままにしますか？ どちらを選ぶかは、あなたの自由です」

\*

「最初に、あなたについて振り返ります。……あなたには彼女が居ます」

「肩まで届く栗色の髪が自慢の、かわいらしい彼女です。それが誰か、もちろんあなたには分かりますよね」

「あなたと彼女は、とても仲が良かったです。いつも一

緒に居て、心から愛していました」

「本当に幸せだったんです。あなたも、……彼女も」

「彼女はずっと思っていました。あなたと付き合い続け、やがて結婚するのだと」

「あなたと結婚し、子供を産み、幸せな家庭を作るのだと」

「そう——思っていたんです」

「でも、そう思っていたのは彼女だけでした。あなたは、彼女より好きな人が居たんです」

「彼女は泣きました。何度も声を上げて、嗚咽を漏らして、まるで子供のように」

「でも、彼女は優しくったんです。慈悲深くて、あたたかい人でした」

「別れてもいい。でも、別れる前に一つだけ——」

「そう。彼女は一つだけ、あなたにお願いをしました。とても簡単で、かわいらしい最後のお願い」

「一日だけ、あなたは彼女の言いなりになること。それが、彼女のお願いでした」

	3	2
	彼女の家・自室	<p>シーン1 闇の中、聞こえる声</p> <p>「あなたはありがとうと言い、約束をしました。必ず、彼女の言うことを聞く――と」</p> <p>「そして、今日がその約束の日なんです。あなたが、そして彼女が――待ち望んでいた一日です」</p> <p>「……わたしのこと、思い出しました？」</p> <p>「それでは――。はじまり、はじまり……」</p>
<p>「ごめんね、わたしのために……一日も」</p>	<p>彼女の部屋に入り、ベッドに腰掛けるあなた。彼女は部屋の中央に立ったまま、あなたへと微笑みかける。暗い表情を浮かべながら、彼女は弱々しい声を出す。</p>	

「約束してたって言っても、ちょっと嫌だったよね」

「好きだって言ってた子、この前見たよ」

「あ、この子なんだ。……あなたが好きそうな子だなあつて、思っちゃった」

「……付き合う前から好きだったって言ってたよね」

彼女は両手を合わせ、無理をして明るい口調で言う。

「最初からそう言ってくれたらよかったのにー。応援してあげたよ？」

「そんなに仲良くはなかったけど、わたしもあの子と友達だから」

「二人きりで……は難しいかもだけど、一緒に話すぐらいならきつと出来た」

「あなたはあの子と付き合って、わたしは二人の仲を見守るの」

「今になって思っちゃうんだあ。あー、そういうのもよかったのかなあって」

「んーっ？ あ、ごめんごめん。こんな話がしたかったんじゃないよね」

つんと人差し指を立てた彼女が、天井を指差して微笑む。

「あなたは今日一日、わたしの言いなりになりますっ！」  
「って、知ってるかあ。知ってるから今日来たんだもんね」

すーっと息を吸った彼女は、両手を後ろに組んで真剣な表情であなたを見つめる。

「難しいことは言わないし、痛いこともしない」  
「それだけは約束するから……今日一日、よろしくね」

彼女は両手で両の頬を軽く叩き、笑顔で言う。

「……よしっ。じゃあカーテンを閉めますっ」

彼女がカーテンを閉め、部屋は電灯の明かりだけになる。

「これだけじゃないよ」

彼女は呟き、あなたの下半身を指差す。

「……脱いでね」

恥ずかしそうに言った彼女は戸惑うあなたを見て、  
今度は少し強く言う。

「お願い。約束したよ。……脱いで」

彼女に促されたあなたは約束を守り、上着は着たま

ま下半身はパンツだけになる。

「うん、よく出来ました。じゃあ今度は……電気、消すね」

彼女は部屋の入り口にあるスイッチに手を伸ばし、  
明かりを消す。

「……ふふ。真っ暗だね」

視界が無くなりそわそわと視線を彷徨わせるあなた  
を見て、彼女が耳元で囁く。

「――絶対に、動いちゃだめだよ」

「何が起きても、何があっても……わたしがいいって言う  
まで、動いちゃだめ」

彼女はすうっと後ずさり、あなたへ冷たい目を向け

る。

「わたしのこと……もう好きじゃないんだよね」

「わたしよりもっと好きな人がいるから、わたしと別れるんだもんね」

「分かってる。分かってるの。でも、理解するのと納得するのは違うかな、って」

「だから今日は、あなたを……わたしのものにさせてね」

「……っん。よし、それじゃあ目を瞑ってね。絶対に開けちゃだめだよ」

「目、閉じたかな。閉じたよね？ うん。閉じた……よね。わたしは信じてるよ」

「じゃあ——目を開けないで、動かないで、わたしの話を聞いてね」

「すうーっ………はあっ」

彼女が大きく息を吸い、溜め込んだ息を一気に吐く。



「ねえ、あなたは今……自分がどんな状況なのか分かってる？」

彼女はあなたを見下ろしながら、少しきつい口調で言う。

「大好きだ、って言ってた彼女に別れ話をして……その彼女の家に居るんだよ？」

「嫌いになったから。わたしが嫌われるようなことをしたから」

「そんなことじゃなくって、最初から別に好きな人が居たからって理由で」

「わたしね……本当に、本当の本当にあなたが好きだった。ううん、今も好き」

「好きだから、今日一日だけであなたを許してあげるの」

彼女の声が少しずつ小さくなり、呟くような声になる。

「……もし嫌いだったら、こんなことしなかったよ」

彼女は自分の声が小さくなっていることに気付き、  
わざとらしく明るく振る舞う。

「——約束を破ったらどうなるか、言ってなかったよね」

「緊張しないでいいよ？ 酷いことなんて絶対にしない。  
傷付くのはきつとわたし」

「……まあ、そんなこといいんだって。それより——分か  
ってる？」

彼女が再びあなたの元へと歩み寄り、囁く。

「今のあなたは、彼女の部屋でパンツ姿になってるの」

「小さいおちんちんが、パンツだけで隠れてる」

「動いちゃだめ、って言ったの覚えてる？ 覚えてるよね」

「もちろん、おちんちんも動かしちゃだめだよ。約束だから……ねっ？」

「目を開けたらだめ。動いちゃだめ。だから当然、触ってもだめ」

「何も難しくないよね。きっと小さな子でも出来るよ」

「……出来なかったら、あなたは子供以下」

「ううん、子供に失礼かな。もし約束を守れなかったら――」

――あなたは犬未満ね」

「やだなあ……わたし、そうなったらどうしよう」

「ずっと犬未満の彼氏と付き合っていました、なんて誰にも言えないよ」

「恥ずかしいし……誰にも見られたく―― あ、目は開けちゃだめだよ」

「ごめんね。開けてないのは分かってる。もしかしたら開けちゃうんじゃないかって思ったの」

「信用してないわけじゃないよ。信用してる」

「だってあなたは人間だから。……人間だよ。……犬未

満じゃないよね？」

「そうだよ。犬未満だったらもう我慢なんて出来ないよね」

「雌が居たら押し倒して交尾しちゃってるよね。動物だったら……ね」

「おちんちんを勃起させちゃって、犬のおまんこにずぶずぶーって、挿《い》れちゃってるよね」

「それが動物だもんね。でもあなたは違う。……あなたは人間」

「すぐ近くに女の子が居て、真っ暗な部屋に下着姿で居ても何もしない」

「ううん、何も出来ない。だって理性があるから。約束、したから」

「下着姿でも、彼女の前でも、二人っきりでも」

「興奮しても——動いちゃだめ」

彼女はあなたの耳に触れそうな距離にまで口を近づけて言う。

「できるよね？」

あなたをじっと見つめ、彼女はまた少しあなたから  
離れる。

「……わたしの部屋に二人でいるとき、いろいろ思い出  
ちゃうね」

「初めて家に呼んだ日。初めてキスをした日。そして――  
初めてエッチした日」

「あの時は緊張してたなあ。……だってそんなことするつ  
もりじゃなかったもん」

「下着だっていつもと同じ。あ、最初から勝負下着なんて  
持ってなかった。えへへ」

「勝負下着を買ったのはあの後。あなたが好きそうな下着  
を選んでたっけ……」

「高い下着を買ったこともあったよ。……あなたはそんな  
に気に入ってなかったけど」

「……あの時は痛かったなあ。初めてだったから……血も  
出ちゃったね」

「でも痛いだけじゃなかったよ。あなたがわたしを抱きし  
めて——大好き、って言ってくれたから」

彼女はそつと顔を近付け、あなたに囁く。

「あの時の言葉は本気だって……信じてもいいよね」

「……じゃないと、わたしも結構辛いかな」

「おちんちんを初めて見た日に、そのまま挿《い》れられ  
ちゃったから」

「あの時はゴムもしてなかったよ。それなのにあなたは中  
で出してさ……」

「わたしが痛くて、でも……気持ちよくて。なんだかよく  
わからなくなってる」

「わからないまま……わたしの中で射精されちゃった」

「……気持ちよかったし、嬉しかったよ。お腹の中が熱く

て、ぽかぽかしてた」

「でもあの時、もし赤ちゃんが出来てたらどうしたのかな？」

「あなたは逃げた？ それとも……一緒に育てるって言うてくれた？」

「……ただのたとえ話だから答えは出ないけど、育ててくれたら嬉しいかな」

「だって赤ちゃんが出来てたら、それはあなたのせいだから」

「あなたがわたしの膣の中におちんちんを挿《い》れて、中に精液を出したから」

「……あれ？ わたしの気のせいかな。おちんちんが大きくなってる？」

「おっかしいなあ。何もしてないのに。おちんちん……どうしたの？」

「今ちょっと動いた？ 動いちゃだめって言ったのに。……気のせいかな。気のせいだよな」

「動かないって約束したもんね。だからわたしは信じるね。気のせいだ、って」

「わたしがおちんちんって言ったり……、おまんこって言ったり……」

「それだけでおちんちんが動くわけないよね」

再び彼女があなたの耳元へと口を近付けてゆつくりと囁く。

「おちんちん……勃起なんてしてないよね？」

「目を開けたらだめ。触ったらだめ。動いちゃだめ。……約束したもんね」

「わたしがエッチなことを言うだけで……おちんちんが大きくなるなんてあり得ないよね」

「……………あつ、動いた」

「どうしてなのかな……。約束、忘れちゃったのかな」

「動いちゃだめ、って言ったのに。どうしておちんちんがびくびくしてるのかなあ？」

「約束……守れなかったね」



彼女が立ち上がり、あなたから離れる。

「……でも、仕方ないか。だってあなたはエッチだもんね」  
「よくわたしのおっぱい触ってたし……だめって言っても  
パンツの上からクリトリス触るし……」

「きっと我慢したくても出来ないんだよね。いつまでも……  
ずーっと」

「ちょっと甘いけど、許してあげる。動かなかったってこ  
とにしてあげる」

「……おちんちん、しこしこしたい？ オナニーして、気  
持ちよくなりたい？」

「そうだなあ……おちんちん辛そうだし、それもいいの  
かなあ」

「でも……やっぱだめ。その代わり、わたしがしてあげる」

4

シーン2 君の声、柔らかな手のひら

「まだ動いちゃだめ、って言いたいところだけど……うん、一回だけ許してあげる」

「……パンツ、脱いでいいよ」

彼女はあなたの真横に座りあなたへと言う。

「おちんちんでばんぱんになったパンツを脱いで」

「目は開けちゃだめ。閉じたまま……パンツだけ脱いでね」

「急いだらだめ。ゆっくり脱いでね」

「うん、そう。ゆっくり。自分の手でパンツを脱ぐの」

「あ、やっぱりおちんちんぴくぴくしてるね」

「触りたそうだけど……わたしは触っていいなんて言っていないよ」

「……ふふつ。そんなに触りたいの？」

「さっきからずーっとぴくぴくしてる。おちんちんから透明なお汁が出てきちゃってるね」

「あなたが考えてること、わたしには分かる気がするなあ」

「……わたしに早く触って欲しい、って思ってるよね？」

「でも、覚えてる？ わたしとの約束」

「目を開けちゃだめ。動いちゃだめ。今許してあげたのは……動くことだけ」

「目……開けちゃだよ？ 約束破ったらもう知らない」

「わたしとあなたは恋人じゃなくなるんだから……もし、もしもの話だけど………」

「あなたが目を開けて、わたしを襲ったら……わたしは警察に行くね」

「襲われました。おちんちんを見せられました。全部無理矢理でした、って」

「わかる、よね。今のあなたはわたしをいつでも襲えるの」

「でも——襲ったらおしまいなの。引越さなきゃいけないよ」

「ううん、それだけじゃだめかも。一生出られなくなっちゃうかも」

「あれ。どうしたの？ 手は動かしていいんだよ。パンツ……ちゃんと脱いでいいよ」

「……うん。そうそう。ゆーっくり。ゆーっくりパンツを脱いでね」

「脱ぎ終わった？……うん、脱いだみたいだね」

「ふふ。そんなに触って欲しいの？ 大きくなったまま、ずーっとびくびくしてる」

「せっかく触ってあげるんだから、すぐにイッちゃだよ？」

「………待たせてごめんね。それじゃあ、触ってあげる」

あなたの股間に手を伸ばした彼女が、そつと性器に触れる。

「——っんっ。わ、やっぱりすごく硬くなってる……」

「触らなくてもびくびくしてたのに、触ったらびくびくしちゃった」

「……毎日じゃないけどさ。それでも、あなたとは結構い

っばい……エッチしたよね」

「でも、こんなに硬くなってるの……初めてだと思う」

「こういうのが好き……だったのかな。だとしたらあなた  
って——変態、なのかな？」

「うー……。今すっ……ごくびくん、って動いた」

「……そっか。そうなんだね」

性器に手を添えたまま彼女の唇があなたの耳許に近  
づく。

「へ、ん、た、い、さ、ん」

「おちんちん、気持ちいいの？ まだ何もしてないのに？」

「わたしの手が触れてるだけ。それも先っぽだけだよ？」

「……また動いた。ふうん……気持ちいいんだね」

「残念だなあ。あなたがそんなだったなんて思わなかった」

「変態、って言われただけでおちんちんが反応しちゃうな  
んて……知らなかったなあ」

「ねえ、本当にしこしこして欲しい？ おちんちん、気持ちよくして欲しい？」

「ほら……素直に言ってよ。教えてくれなきゃ、何もしてあげないよ？」

「あつ。もしかして……何もされない方が気持ちいいのかな？ だって——」

「——変態だもんね」

「……ふふふつ。ねえ、あなたは気付いてる？」

「おちんちんの先から、透明な液がたくさん出てるよ。とろとろしてて、つやつやしてるお汁」

「我慢してるのかな。ううん、こんなに溢れちゃってるんだもん。我慢出来てないよね」

「我慢汁って言うぐらいなんだから、出しちゃだめなんじゃないかなあ……」

「だって、まだ何もしてないんだよ。こんなんじやしこしこしたらすぐ出ちゃうよ？」

「——あなたの、精液が」

「早くしこしこして。早く出させて、ってそう思ってるのかな？」

「ごめんごめん。おちんちんがぴくぴくするのがちょっと面白くて……ね」

「いいよ。今からしてあげる。あなたのおちんちん、ゆーっくり……しこしこしてあげる」

そつと添えられた彼女の手のひらが静かに性器を包み込み、ゆっくりと上下に動き始める。

「……ほんとに変態さんなんだね。おちんちんぎゅって握っただけなのに……」

「さっきからぴくぴくしてて……我慢汁がくちゅくちゅ鳴ってる」

「わたしにはおちんちんが無いからさ、あなたがどれぐらい気持ちいいのかわかんないんだ」

「——ちょっとだけ、悔しいかな。だって、本当に気持ち

よさそうなんだもん」

彼女の手は上下に動きながらも、あなたからそっと顔を離して溜息を吐く。

「わたしもね、その……オナニー……するよ？ ま、毎日じゃないんだけどね？」

「でも、結構するんだ。あなたも好きなおっぱいを触ったり……揉んだり……」

「乳首つまんだり……クリトリスを触ったり…………よく……するんだ」

「それでね、体がほわーってあたたかくなって……ぼーっとして……」

「気付いたら体がびくびくしてて……エッチなお汁が出るの…………」

「すぐく気持ちいいんだけど、あなたの顔は……わたしよりもっと気持ちよさそう」



「ずるいな。羨ましいな。なんでかな。どうしてそんな顔  
するのかな」

「やだなあ……。おちんちんがあって、硬くして……。我慢  
汁出して……………」

「どうしてそんなに気持ちよさそうなの？ どうして……  
そんなに……………」

「……あつ。ごめんね。羨ましかっただけ。それだけだよ」

再び彼女の顔が近付き、あなたの耳許で囁く。

「おちんちん、気持ちいい？……って、聞かなくても分か  
ってるんだけど」

「硬くなって、びくびくしてて……。我慢汁がたーくさん  
出てる」

「これで『気持ちよくない！』なんて言ったら怒ってたよ？」

「……言ったことはなかったんだけど……………わたしね、  
おちんちん好きなんだ」

「あ、違うよ。違うからね。誰のでもないの。あなたのおちんちんだから……好きなの」

「——他の人のおちんちんなんて、見たことないから。だから比べたりは出来ないんだけど……」

「なんとなくね、あなたのおちんちんがいいなあって思うんだあ……」

「……………ね、好きだよ。あなたのおちんちんも、あなたも」

「不器用なところも、たまに頑固なところも。なにもかも……全部まとめて、あなたが好き」

彼女の手が止まり、あなたを見て彼女が微笑む。

「どうして手を止めるの？　って思ってるよね」

「もっとしこしこして欲しい。おちんちんを気持ちよくさせて——って」

「ねえ……。もしここでわたしが『やっぱりやーめた』って言ったらどうするの？」

「おちんちんからこーんなに我慢汁が出てるのに、射精も出来ないまま終わるの」

「それでね、『もう飽きたからごめんね。ばいばい』って言ってあなたにさよならするの」

「おちんちんが硬くなったまま、パンツに我慢汁を付けてあなたは帰るの」

「どうかな？ 嫌かな？ 射精したい？ おちんちんしごいて欲しい？」

「……そうだね。やっぱりこのままなんて嫌だね。苦しいよね……」

「ごめんね、わたし……嫌な子かも。あなたの気持ち………分からなくなってきたのかな」

「意地悪するの……もうやめる。あなたのおちんちん、気持ちよくさせてあげるね」

再び彼女の手が上下に動き始め、あなたの性器を擦り上げる。

「苦しかったよね。ごめんね。おちんちん、ずっとびくびくしてたもんね」

「ずーっと出したかったんだよね？ 我慢汁なんかじゃなくて、ザーメンを出したかったんだよね？」

「本当にごめんね。あなたが……あなたが今も好きだから、つい意地悪しちゃった」

「こんなことしたの初めてだけど……その………ねっ？」

「わたしも……興奮してるみたい。ちょっと恥ずかしいけど……パンツにまで染みてきちゃった」

「あなたを変態って言ったけど、わたしの方が変態なのかな……？」

「……今、どきどきしてる。気持ちよさそうなあなたを見て。わたしも、気持ちよくなって………」

「ほんの少しずつなんだけど……今は見たくなくなってる」

「あなたが……限界になるところ。おちんちんから白い液体をどぴゅどぴゅって出すところ……」

「だから……イッていいよ。辛いよね。我慢してたんだよね？ いいよ、出して……」

「おちんちん、気持ちいいんだよね？ 我慢汁たくさん出てるもんね」

「ほら、もう何回もびくびくしてる。出したい？ 出そう？」

「もういいよ？ ほら……5……4……3……2……1……んっ……」

あなたの性器からは勢いよく精液が噴出し、彼女の部屋を汚す。

「あーあ。おちんちんから出たザーメンでお部屋汚れちゃった……」

「匂い残らないといいんだけど……」

彼女は性器から手を離し、そっとあなたから顔を離す。

「……それにしてもいっぱい出たね。そんなに気持ちよかった？　もしかして疲れちゃった？」

「ベッドも床も、あなたのおちんちんから出たザーメンでべたべただね」

「わたしの手も……我慢汁とザーメンでびちゃびちゃになってる」

「あなたがすごー……く、気持ちよくなれたんだったら嬉しいな……」

「ねえ……やっぱり目、開けたい？　目を瞑ったままなんて……嫌？」

「気持ちいいだけじゃ……やっぱり物足りないのかな」

「……でも、まだダメ。もし目を開けたら………本当にそこでさよならだよ」

「目を開ける？　開けてみる？　わたしの顔、見たい？」

「それとも顔じゃなくて……あなたを虐めてるだけで濡れちゃったあそこが見たい？」

5

「見たかったらいいよ。見せてあげる。でも、それでおしまい。何もしてあげない」

「ううん、何もさせてあげない。オナニーもさせない。触ってもあげない」

再び彼女の顔が近付き、あなたの耳許で囁く。

「あなたにも分かるよね？ どうしたらもっと気持ちよくなれるのか……………」

「……………うん。偉いなあ。そうだね。やっぱりそうするよね」

「目を閉じたまま、このまま……。気持ちいいこと……………：続けようね」

シーン3 手のひら、触れるもの

彼女は身をよじり、細い指先を自らの下半身へと伸

ばす。

「……………っ……………はあ……………んっ……………」

「んうっ……………ん……………っはあ……………ふっ……………」

「どう……………したの？ さっきから……………もじもじしてる……………けど……………？」

「わたしのことが……………気になる……………の……………かな？」

「言った……………よ、ね？ わたしも……………気持ちよくなってる……………って……………ふあっ……………」

「……………えへへ。あなたの前で……………ううん、誰かの前で……………んっ、オナニーするのなんて……………初めて……………だよ？」

「あなたには見えないっ……………けど……………わたしも……………も……………気持ち……………よすぎて……………あっ……………」

「えっちな声……………が、か……………勝手に出ちゃうっ、の……………」

「ここまで我慢したから……………だから……………あなたも……………いい、よ……………」

「一緒に……………気持ちよく……………なる？ オナニー……………」



よっ?」

彼女の声に従い、あなたは自ら性器をしごき始める。

「あはっ……さっきあんなに出したのに……また……おちんちんが大きくなってる………」

「ねえねえ……っ、わたしの声だけを聞いてオナニーするって……どんな感じ?」

「いつもと同じ? それとも……いつもより気持ちいいの……かな……?」

「……目を開けたらダメだよ。目は瞑ったまま……それが……わたしとの……約束……っ………」

「……んっ……はあ……っ……はっ……ふふ、辛そう……かな」

「あなたの好きなパンツをはいたまま……指で何度もこすってるの………」

「やっぱり……ね、わたしも……あなたのこと変態っ

て……言えない、の……かも……」

「だってね……パンツの上から……クリトリスを触つ、  
てる……のに……ね……」

「指が……とろとろのお汁っ……で、びちゃびちゃになっ  
……てて……」

「どう、しよう……わたし……わたし……こんな  
に変態だったなんて……」

「あなたの、こと……あんなに変態って言う、た……のに  
……それ……なのに……」

「……ごめん、ね。そう……だよね。こんなに気持ち  
いいんだもん……やめられ……ない、よね」

「わたし……どう……したらいいのっ、かなあ？ こんな  
気持ちいいこと……知っちゃったん……だよ？」

「好きな人に……んっ……はあ……ふっ、……目を、  
瞑らせ……て……」

「パンツ……はいた、まま……クリトリスを……触つ、  
て……オナニー……して……ふあっ……ん」

「こんな……こと……もう、出来ない……かも……  
……しれないんっ、だよ……ね……」

「わたしを……好きにっ、なっ……て……お願い、も  
……聞い……て、てくれて……」

「……やだ、よ。これで最後——なんて、そん、なの……  
……やだよ……」

「これより……気持ちいいこと、なんっ、て……絶対  
……ない、よ……？」

「こんなに……こんなに好きになれる人なん、て……  
もう……できないよ……」

「ね、え……もう……ね、わたし……限界……か  
も、しれないんだ」

「さっき、から……クリ、トリスが……ぴくぴく……  
して……るの……」

「……ふ、ふ。でも……それは、あなたのおちんちん  
も……同じ、だね」

「もう、きついんっ……だよ、ね……そう、だよ……」

……ね」

「一緒に……イったら……もっと、気持ちいいの……かな？」

「今でも……こんなに気持ちいい、のに……もっと……気持ちよくなっ、たら……」

「わた、し……壊れちゃう、かも……」

「オナニーの……ことしか、考え、られ……ない……変態に、なっちゃう……かも……」

「もし……そう、なっ……たら……ふあっ、ふ……んっ……はあ……ふう……ふう……」

「あなたは……どう、する……？ わたしの……こと……嫌いに……なる……？」

「それと……も……、わたしの……体で……色んな、こと……する、の……？」

「あは……は……なにも……分からないぐらい……に、おかしく……なっ……て、たら……」

「それ、でも……いい……かも、ね……」

「あなた……の、好き……な時……に、好きな……だけ……  
……わたしの体を……使う、の……」

「おちんちん……を、舐めさせてもいい、よ……コン  
ドームも、しなくて……いいよ……？」

「わたしの、おまんこに……おちんちんを……挿（い）れ、  
て……精液……たくさん……、出していい、よ……」

「ふあっ、ふ……んっ……はあ……あっ……  
もう、だ……め……」

「もうちょっ、と……がんばって……みたかった、け  
ど……こん、なの……むり、だよお……」

「あなたも……無理、しない……でね。イきたくなっ、た  
ら……イッ……てね……」

「でも……もし、よかつ、たら……一緒に……イッ、  
て……くれ……た、ら……嬉しいっ、な……」

「ひゃうっ、う……っ、はあ……ふっ、んんっ、ん……  
……んう……く……はあ……ふ……」

「も、う……だめ……イク……いつ……あ……あっ、

……んっ……ああああああんッ！」

彼女の腰がびくびくと震え、パンツからは染み出した液が垂れ落ちる。

「はあ……ふ………はあ………はあ………っ」

「射精……したん、だね。一緒に……イッてくれたの……かな？」

「……だったら、嬉しいな………」

「あなたも……わたしと同じくらい………気持ちよくなれてたら……いいな」

「………なーんて、やっぱりわたしも変態だね」

「最後に……あなたとの共通点が分かって、ちょっぴり嬉しい………かも」

「……ううん、嘘。ちょっぴりなんかじゃなくて、たくさん。たくさん嬉しい………」

「………あーあ。お部屋こんなに汚くなっちゃって………」

## 6

匂いも残っちゃいそう」

「あ——目は開けちゃだめ、だよ。約束、だから」

「大丈夫、おちんちはちゃんと綺麗にしてあげる。ティッシュで、だけど」

「……フェラを期待してた？ ふふ、だめだよ。そういうのは新しい彼女にお願いして。ね？」

「じゃあ拭いてあげる。じっとしててね……」

シーン4 触れたもの、君の心

後片付けが済み、彼女があなたを見て微笑む。

「……よし、っと。これで完璧かな」

「おちんちんも綺麗になったし、パンツもちゃんとはいた」

「ちゃんとわたしの家に来た時と同じ格好。わたしの部屋も……匂い以外は問題無し、と」

「まあ……まだ一日なんて経ってないけどコレでわたしは

満足かな」

「ばいばい。もう、帰っていいよ」

「んっ？　どうかした？　目を瞑ったままでも……何か言おうとしてるのは分かるよ」

「……ふむふむ。まだ一緒に居たい、って？　約束だから……って？」

「……そう、だね。約束……したんだよね」

「——うん。でも、いいの。わたしがもういいって言うてるんだから、それでいいの。おしまいなの」

「休みの日なんだからさ、早く帰ってゆっくりしなよ。ね？」

彼女はあなたの背中を押し、扉まで連れて行く。

「今日は、本当に……ありがとう」

「好きな人と結ばれるといいね……。わたしは、応援してるから」

「大丈夫だよ、あなたなら。わたしが……好きになった人



だもん」

（『わたしから涙を堪えながら話すように』）

「ほら早く出ていきな。あなたとは……これで……さよならなんだから」

「あ、こら……今目を開けようとしたでしょ……だめだよ。約束、でしょ」

「お願いだよ……目は、開けちゃだめ。あなたは目を閉じたまま、わたしと……別れるの」

「早く出てってよ、早く……お願いだから……」

「だめ……だめなんだよお……目は開けないで、って……言ってるだろお……」

あなたは目を開け、振り返り彼女を見つめる。

「——っ！　なんで見るのかな……。目を開けちゃだめっ

て……………言ったじゃんか……………」

「ばか……………ばかばかばかばか……………ばか！ この変態！ 駄目人間！ ばか！ ばか……………」

「やだよ、もう……………泣くに決まってるよ……………あなたのことが……………今でも好きなんだから……………」

「今日だけで忘れるわけじゃないじゃん……………好きなんだよ……………ごまかせるわけないよ……………」

（泣きながら力なく話すように）

「そのまま行ってくれたらよかったのに……………。そしたら……………わたしだけでよかったのに……………」

「あなたが優しいこと、わたしは知ってるんだから……………だから……………分かるんだよ……………」

「わたしが泣いたら……………わたしが傷付いてるのを知ったら……………あなたはわたしを見捨てられなくなる、って」

「そんなズルみたいなこと……………わたしはしたくなかつ

た……」

「そんなことしてまであなたを引き留めたくなかった……  
……なのに……なのに……」

あなたは無言のまま、涙を浮かべて話す彼女を抱きしめる。

「なっ——だめだよ……抱きしめるなんて、そんな……」  
「もう、忘れられなくなっちゃうよ……あなたの好きな人に……嫉妬しちゃうよ……」

「……離してよ、だめ……あなたは、好きな人と——」

あなたは彼女を抱きしめたまま、そつと口付けを交わす。

「——っ?! んっ……。っな、なんで……」

「キスなんてされたら、また……期待しちゃうのに……」

7

「それとも……その——また、期待してもいいの……かな」  
「……………何か言ってよ」

「……………今、ぎゅっ、て……また抱きしめてくれた？」

「やっぱり……………わたしのことが——好き？」

「まだわたし……………あなたの彼女でいても——いい？」

あなたは彼女と、ゆっくりと唇を重ねる。

「んむっ……………んっ、ん……………っ」

「……………んっ、……………はあっ、……………っふう」

「あなたが恋人で、よかった」

「——あなたを好きになって、本当に……………よかった」

エピローグ

「こうして、わたしの恋は……………まだまだ続くことになりました」

「本当はあなたを忘れたくて、嫌われたくて……。それで

あんなことをしてしまったんだけど……」

「でも、後悔はしてません。わたしの気持ちを伝えられて

……受け入れてもらえたんだから」

「あなたとの恋が、一日でも長く続くといいな。最後まで  
……ずっと、あなたと——笑顔で」

【了】